

甲賀市レッドリスト2012 <2007年からの種数変化>

判定区分と定義	2012年	2007年	増減	分類別の種数変化
絶滅種 過去に記録があるが、現在は見られない。	2	0	2	[哺乳類]+1、[昆虫類]+1
絶滅危惧種 数カ所以内の生息地、生育地、繁殖地。	77	65	12	[植物]+1、[哺乳類]+1、[繁殖鳥類]-1、[両生類]-1、[爬虫類]±0、[魚類]+3、[昆虫類]+6、[陸産貝類]+3
絶滅危機増大種 生息・生育域が限定される。減少度合いが著しい。	108	83	25	[植物]+8、[哺乳類]±0、[繁殖鳥類]+8、[両生類]±0、[爬虫類]±0、[魚類]+1、[昆虫類]+11、[陸産貝類]-3
要注目種 情報不足。環境指標等の理由で注目が必要な種。	191	131	60	[植物]+16、[哺乳類]+6、[繁殖鳥類]+2、[両生類]+2、[爬虫類]±0、[魚類]-3、[昆虫類]+37、[陸産貝類]±0
地域種 甲賀市付近に特徴的な分布をする種や、市内に特有な形態や遺伝の型が分布する種、市内の環境を特徴づける種。	28	48	-20	[植物]-7、[哺乳類]-3、[繁殖鳥類]-4、[両生類]-2、[爬虫類]-2、[魚類]±0、[昆虫類]±0、[陸産貝類]-2
合計	406	327	79	

※ 種数の比較にあたって、2007年に選定して2012年に選定しなかった「菌類(キノコ類)」の種数と「要注目種(のうち外来種)」の種数を除外した。

<種数の増減とその理由について主要な点>

◇「甲賀市レッドリスト2012」では、前回2007年と比較して、全体の掲載種が79種増加した。

◇全体の掲載種の増加に最も影響があったのは「要注目種」の増加(+60)で、植物(+16)、昆虫類(+37)の増加が顕著である。新たに生息情報が確認された種類や、現況は正確に判定できないが減少傾向のため、「要注目(情報不足)」とした種類が多い。

◇「要注目種」のうち、植物、昆虫類、哺乳類のように、今回明らかに種数が増加したグループについては、まだ現況把握が十分でなく、今回に「要注目種」とした種類が、次回の見直し時に、より上位の「絶滅危惧種」、「絶滅危機増大種」となる可能性が高い。一方、「要注目種」の目立った増加が見られない繁殖鳥類、両生類、爬虫類、魚類、陸産貝類については、今後は掲載種内でのカテゴリー間の移動はあるものの、全体種数の増加は少ないと見込まれる。

◇「絶滅種」の2種は過去の文献や標本など新たな情報を確認したことにより、認定した。

◇「絶滅危惧種」、「絶滅危機増大種」の増加は、より下のカテゴリーの「要注目種」に掲載された種が、ランクを上げたものが大半で、全体種数の増加には影響していない。

◇「地域種」については、タヌキ、キツネ、ゲンジボタルのように、身近で親しみやすいただけの理由での掲載は止め、甲賀市での分布が重要であるものを中心とした選定基準としたため、種数が減少した。

◇5年間で全体の種数増加には、調査による現況把握の進展が大きな影響を与えたが、決して「5年間で市内の生き物の生息環境が変化しなかった」のではなく、「以前は不明だった状況がより正確に判明してきたこと」の認識が重要である。5年間の変化が種数増加に与えた影響のみを区別することは困難だが、この5年程の間に生息状況に変化が起きたと考えられる例には以下のことがある。

- 水田、ため池、湿地にすむトンボ類、ゲンゴロウ類、ガムシ類など里地の水生昆虫が急減した(化学物質や外来生物が原因と考えられている)。
- ニホンジカの急増により、山地の林床の植物やその植物を餌とする昆虫類が減少した(特にチョウ類で変化が把握された)。
- 里山の放棄により、明るい雑木林や草地にすむチョウ類の減少傾向が明らかとなった。
- 河川の魚類の中で、ギギ、ムギツクの減少傾向が明らかになった。
- 河川にすむ鳥類の中でヤマセミ、カワガラスの生息確認数が減少した。